

# 研究旅行奨励制度報告書

## テーマ「イギリスにおける魔法文化」

目的地：イギリス（ロンドン・コーンウォール・オックスフォード）

滞在期間：2013年8月28日～9月3日

15AR072 吉田早希(代表)

15AR126 田口紋菜

### 目次

第一章：研究旅行の目的

第二章：期待される成果

第三章：旅行日程

第四章：研究結果

第五章：考察、参考文献

## 【第一章：研究旅行の目的】

私たちは映画や書籍で小学生の頃から『ハリー・ポッター』に親しんできた。2007年の最終巻の出版、2011年の最終章映画公開の後、現在でもこの作品は世界中でヒットしており、ついに今年ロンドンでは新たに「ハリー・ポッター ミュージアム」なるものが完成し、日本においても来年の夏、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンにハリー・ポッターのアトラクションが完成する予定である。そこで私たちは、魔法を題材としたこの作品が、なぜここまで世界中でヒットしたのかということに興味を持ち、原作地イギリスの文化的・歴史的背景を研究する価値があると考えた。

イギリスと言えば、近代科学を成立させたニュートン(1642年—1727年)で知られているが、彼の科学理解と魔術思想は深い関係にあった。例えば、近代自然科学がいかにしてヨーロッパに誕生したのかを探求した科学史の本、山本義隆著『磁力と重力の発見 1-3』(みすず書房、2003年)によると、磁石は古代から宗教儀式に用いられ、魔術の小道具として使われ、磁力は生命力を持った霊的な働きと見なされてきたが、ニュートンは古代から魔術とされてきたこの磁力の遠隔力をヒントの一つにして万有引力を発見したという。科学と魔術、このように一見、正反対の文化が歴史的に共存してきたからこそ、科学的世界観の支配する現代においても、魔法や魔術などに対する興味、関心が尽きないのではないかと。

そこで、私たちは研究を通して、現代イギリスにおける魔法文化に実際に触れて、現地、どれほどの、また、どのような役割を果たしているのかを明らかにしたい。

## 【第二章：期待される成果】

この旅行の中で、魔法博物館(Witch Craft Museum)を訪ねたり、魔女をテーマにしたミュージカル「WICKED」を鑑賞したりすることで、イギリスの現実の生活においてどれほど魔法文化が大きな役割を占めているのかを実感できると思う。また私たちの内の一人は卒業論文ではアメリカの魔女裁判やその文化的背景も取り扱ってみたいと検討しているので、今回の研究が極めて重要である。

イギリスからアメリカにはアメリカ建国以来、ピューリタンのキリスト教だけでなく、カルト教や魔術などのいわば負の側面の流入も予想されるから、今回はイギリス研究をし、今後のアメリカ研究に役立てたいと思う。さらに、日本でも夢枕獏『陰陽師(おんみょうじ)』などを通して「呪(しゅ)」が知られるようになり、科学的な世界観と共に迷信が数多くあり、将来的に他の文化圏との比較研究を進めることもできるかもしれない。

## 【第三章：旅行日程】

8月28日（水）：大韓航空を利用し、福岡発、韓国経由、でロンドンへ行く。ロンドンのホテルに宿泊する。

8月29日（木）：コーンウォールへ行き、イギリス中の魔法使いから寄付された魔法の道具が展示されている、魔法博物館(Witch Craft Museum)を見学し、魔法に詳しい館長へインタビューをする。その後ペンザンスにあるホテルに宿泊する。

8月30日（金）：ロンドンに戻り、大英博物館(The British Museum)内レストランにてイギリスの伝統、アフタヌーンティーを体験する。その後魔女をテーマにしたミュージカル「WICKED」を鑑賞し、ロンドンのホテルに宿泊する。

8月31日（土）：オックスフォードへ行き、ハリー・ポッターの映画撮影ロケ地でもある、オックスフォード大学(University of Oxford) クライストチャーチ(Christ Church)とボドリアン図書館(Bodleian Library)を見学する。その後、イギリス文化とも言えるパブを体験しにザ・イーグル・アンド・チャイルド(The Eagle And Child)へ行く。ロンドンのホテルに宿泊する。

9月1日（日）：ロンドンのハリー・ポッター・ミュージアム(Warner Brothers Studio Tour London The Making of Harry Potter)へ行く。その後大英博物館(The British Museum)へ行き、古代の宗教儀式や魔法・魔術に関する展示物、特にエリザベス1世(在位1588年ー1603年)に仕えた占星術師・数学者ジョン・ディー(John Dee,1527年ー1608年)が使用したとされる、天使と会話するための水晶球や錬金術の道具などを鑑賞する。

9月2日（月）：イギリス文化のマーケットを体験しにロンドン市内のコヴェントガーデンにあるアップルマーケット(Apple Market)とジュビリーマーケット(Jubilee Market)へ行く。午後には空港へ行き、大韓航空利用、ロンドン発、韓国経由で9月3日（火）にかけて福岡へ帰る。

※当初の予定にあったストーンヘンジ(Stonehenge)見学は、日程の都合により削除した。

## 【第四章：研究結果】

### 《8月29日 二日目 研究開始》

初日は丸々移動であったため、二日目に研究を開始した。この日は事前研究の際に読んだ鷹井潤／古田島綾子『ハリー・ポッター物語への旅』（竹書房）で紹介されていた WITCH CRAFT MUSEUM へ行った。ロンドンからペンザンス行きの National Rail Way に乗り、最寄駅の Bodmin Parkway で下車し、そこからタクシーで40分かけて Boscastle へ向かった。



↑ 入口の様子



↑ 魔女のマーク

入口を入ると、ふわふわの髭を生やしたサンタクロースのような容姿の、この博物館の館長が受付をしており、以前日本からメールを送ったことを伝えると、“well done!” と歓迎してくれた。館内はたくさんのブースに分かれており、魔女について学習するには、非常に分かり易い作りであった。ここからはそれぞれのブースについて、説明してゆく。

#### 1、Image of Witchcraft(魔女のイメージ)

ここではたくさんの絵や人形で魔女のイメージ像について紹介されていた。一般的には魔女というと醜い老婆の姿が描かれるが、そのほかにも魅惑的でミステリアスな女性像が描かれているものもあった。魔女は、悪のイメージがある割に、昔からイギリスでは広告のキャラクターなどで使用されていたようで、醜い魔女から美しい魔女まで、たくさんの魔女の描かれたポスターが展示されていた。

## 2、Persecution(迫害)

迫害のブース、つまりここでは17世紀に始まった、魔女狩りについて紹介されていた。スコットランドで使われていたとされる、生々しい拷問の道具が展示されており、一緒に当時の魔女狩りの様子も絵で紹介されていた。イングランドにおいては、不法な道具を使っての魔女への拷問がされていたそう。また、魔女狩りの被害者リストがずらりと並べられており、その人数から当時の魔女狩りの悲惨さがうかがえた。このブースで特に印象的だったのは、魔女狩りから人々を守る運動があったということをも語る、魔女計量椅子(witch-weighting chair)である。これは、大きな天秤状のものであり、片方に人が座る椅子、もう片方に無実を証明する聖書が置かれている。一見、魔女を見抜くためのものかと思っただが、魔女狩りの集団ヒステリーに走らなかった人々が、疑いをかけられた人々を救うためのものだ。当時、その様な運動をしている人々がいたことを初めて知った。

## 3、The Wheel of The Year(年間行事)

近世の魔女たちは、古代からある、季節の儀式や魔女の集会をするために、一年のうち決まった日に集っていたという。その魔女集会のカレンダーのような円盤が展示されていた。その日にちは下記の通りである。

### ◇ Samhain(Halloween)(サムハイン祭)31<sup>st</sup> October

古代ケルト人が11月1日に冬の始まりと、新年を祝って行った祭。

### ◇ Winter Solstice/Yule around (冬至/クリスマスの季節)21<sup>st</sup> December

もともとは当時の頃行われたゲルマン民族の祭。

### ◇ Imbolc(Candlemas)(キャンドル祭)1<sup>st</sup> February

キリスト教の祝祭であり、キリスト教の信仰に従って三つの祝がある。幼子イエスの神殿でのお披露目、そしてイエスが神殿に初めて登壇したことを祝い、また、聖母マリアの清め(主としてカトリック教)を祝う。

### ◇ Vernal Equinox(春分の日) around 20<sup>th</sup> March

### ◇ Beltane(May Day)(ベルテーン祭)1<sup>st</sup> May

昔のケルト族の祭日で、スコットランドやアイルランドでMay Dayにかがり火をたき、踊りを踊ったり、火の間に家畜を踊らせたりした。

### ◇ Summer Solstice(夏至) around 21<sup>st</sup> June

### ◇ Lammas(収穫祭) 1<sup>st</sup> August

イギリスではもと新麦の粉で作ったパンを神にささげて祝った祭。カトリックでは聖ペテロの投獄とその奇跡的脱出の記念日ともいう。

### ◇ Autumnal Equinox(秋分の日) around 23<sup>rd</sup> September

## 4、Stangs(杖)

魔女や魔法使いが使う杖というと、ハリー・ポッターの映画にも出てくる、長さ三十センチほどの細い木の枝のようなものを想像していたが、ここで展示されていたのは、一メートル以上ある、自分の身長とさほど変わらぬ丈夫な杖であった。杖の上部は二股になっており、羊の頭蓋骨がそのままくりつけてあるものもあった。この二股の形は、干し草用のフォークが起源になっているようで、魔女を描いた初期の絵画には、箒ではなく、干し草用フォークで空を飛ぶ姿が描かれている。様々なデザインがあり、視感的に面白かった。ちなみに、そのうちの一つに触ってみた際に、手の指先から足の指先に向かって、電気が通ったような、しびれるような感覚がした。これも魔法の力なのかもしれない。

## 5、Sacred Sites(円形の敷地)

近代の魔女や魔法使いの魔法の練習の場であり重要とされる神聖な敷地の模型として、岩を並べて作られたサークルの展示の横には、実際に行われた儀式の写真が展示されていた。中には、ストーンヘンジで行われた儀式もあった。神聖な水源では、治療の他に恋の魔法や呪いなどに使われていたという。

## 6、The Hare and Shape-shifting(野ウサギと変身術)

イギリスにおける多くの伝説や昔話では、魔女は動物に変身するとされている（特に野ウサギや猫、フクロウなど）。伝統的なコーンウォール人の言葉に「呪われた」という意味で“owl-blasted”という言葉があるそうだ。実際に「賢い女性(The wise woman)」として存在した魔女、Isobel Gowdie が、魔女の疑いがかけられて逮捕された際に、述べたという Shape-shifting（変身の呪文）が残されていた。

I shall go intill [into] a hare, With sorrow, and sych [sigh] and mickle [much] care...

(ウサギになりましょう、悲しみと、ため息と、大きな心配と共に、、、)

I shall go intill a cat, With sorrow, and sych, and a black shot [sudden pain]!...

(ネコになりましょう、悲しみと、ため息と、思いがけない苦しみと共に、、、)

I shall go intill a crow, With sorrow, and sych, and a black thraw [convulsion]!...

(餌袋になりましょう、悲しみと、ため息と、痙攣と共に、、、)

魔女が変身したとされる野ウサギの姿は、顔が野ウサギで体が人間という不気味なものであった。

## 7、Herbs and Healing(ハーブと治療)

魔法において治療とは常に重要視され、魔術やハーブの医薬を使って治療をする魔法使

いや魔女は人々から尊敬されていた。しかしいまだに、こうした魔力を使っただけの治療は政府からとがめられているという。ここではたくさんのハーブが展示されており、それを医薬にしたり、ジュースにしたりする道具もあった。またハーブを使って、人々の治療をしてきた魔女を“GREEN WITCH(グリーンウィッチ)”と言うそうだ。

## 8、The Wise Woman(賢い女性)

ここでは、実際にいた魔女の家を再現してあり、それは今までの想像とかなり違っていた。穏やかな表情の女性が、水晶を手で静かに座っている。もともと魔女とは、The Wise Woman、つまり賢い女性の事を言うのであり、タロットカードや水晶玉で恋占いをしたり、ハーブを使った医薬を作ったりと、近所の人々の相談役であり、医者でもあったのだ。

## 9、Protection Magic(保護術)

魔除けで知られているように、ものを使って身を守るのは、昔から広く使われている魔法であり、様々なお守りがある。中でも一番印象的だったのが、猫のミイラである。これを家に置いておくだけで、ラットやネズミよけになるそうだ。

## 10、Mandrakes(マンドレイク)

ハリー・ポッターシリーズ第二作、「ハリー・ポッターと秘密の部屋」で登場するマンドレイクは、実際に存在したとされており、映画の中では、マンドレイクが土から引き抜かれた際に放つ悲鳴を聞くと命取りになるとされている。ここの展示によると、それは事実であり、マンドレイク採取の際には犬が使われており、一つ採取するたびに一匹犠牲になっていたと言う。マンドレイクは強力な覚せい剤であり、また神聖な成分を含むとされ、エジプトでも神へのお供え物として用いられていた。人の形をしたマンドレイクは幸運を呼ぶお守りとしても扱われていた。



↑マンドレイクと背景に狩の様子。    ↑様々な形のマンドレイク

### 1 1、Fortune-Telling and Divination(占い)

ここでは、魔女が占いに使っていた鏡や水晶、ティーカップやタロットカード、手相の模型が展示されていた。写真に写っている、縁が草花で飾られた真っ黒な鏡は、魔法博物館(WITCHCRAFT MUSEUM)の創設者、セシル・ウィリアムソン(Cecil Williamson)が実際に使っていたものである。鏡を見つめ、その中に答えを見つけるというのは古くからある占いの方法であり、自分の創造性と本心を解放し、精神を強めるそうだ。

またティーカップについての紅茶の茶葉を読み取り、未来を予言するという占いは、19世紀から20世紀の割と最近まで用いられていたものであり、映画の中でも授業の一環として行われていた。トランプのカードの模様や星座など、さまざまなタイプのティーカップが展示されていた。

さらに、手相占いも有名であり、手相を見る魔女は赤いマントを着ていたと言う。





↑ 占いに使われた鏡と水晶玉



↑ 占いに使われたティーカップ

## 12、館長さんへインタビュー

博物館を出る前に、館長さんに時間をいただき、いくつか質問をした。

**質問①：**イギリスには、いまだ魔女や魔法使いが存在すると聞いたが、彼らはどのようにして、魔法を勉強しているのか？

**回答①：**魔法を勉強するのは難しい。なぜなら、彼らは正体を隠して生活しているから。勉強したいのであればたくさんの人に会うこと、そうすればもしかしたら魔女や魔法使いに会えるかもしれないから。ストーンサークルなどのいわゆるパワースポットへ行き、そこにいる人々に会い、そこで何が起きているかを観察すれば何か分かるかも知れない。特に農家の人に話を聞くのがいい。なぜなら、彼らは動物が病気になったりしたとき、魔女に助けを求めたりと、魔女と接する機会が多いから。

**質問②：**なぜここにミュージアムを建てたのか？

**回答②：**この辺の地域には昔から魔女や魔法使いが多く生活していたため。

**質問③：**魔女の定義と何か？

**回答③：**何かを変えることのできる人の事である。呪文を唱えるなり、杖を振るなり、何

かを通して、変えることのできる人であり、ヒーローである。

質問④：あなた自身も魔法使いですか？

回答④：もしかしたらそうかもしれない。

質問⑤：魔女になるためにはどうしたらいいか？

質問⑤：まずは魔女についてたくさん勉強すること。魔女の歴史や、どういった人の事を魔女というのかということを知ることが大事である。あとは人に会うこと。たくさんの人とコミュニケーションをとり、よく観察することが大事である。

館長さんにお礼をし、列車の時間まで少し観光し、二日目の研究は終了した。



↑お土産の魔女グッズ



↑映画に出てきそうな Bodmin Parkway 駅

## 《8月30日 三日目 ミュージカル鑑賞》

午前中はペンザンスからロンドンへ移動し、一度ホテルへ戻り、ミュージカル「WICKED」の当日券をレスタースクエアのチケットカウンターにて購入した。地下鉄構内にあり、チケットも定価より約30ポンド安く購入できた。



↑公式割引ミュージカルチケットカウンター

その後大英博物館へ行き、中にあるコート・レストラン(court restaurant)にてイギリスの伝統的食文化、アフタヌーンティーを体験した。ティーポットに入った紅茶とティーカップと軽食が運ばれ、二段になっているお皿には、上段にサンドイッチやキッシュなどの食事が乗せられ、下段にタルトやマカロンなどのスイーツが乗せられていた。別にスコーンがジャムとバターのようなクロッテッド・クリームと一緒に運ばれてきた。19世紀、公爵夫人が夕食までの空腹を紛らわすために食べたことが始まりであると言われるアフタヌーンティーだが、かなりお腹はいっぱいになった。



↑アフタヌーンティー、一人前£21.45



↑劇場入り口



↑リンゴが原料のビール

19時にヴィクトリアにあるミュージカル「WICKED」の会場へ向うと、多くの観客でにぎわっていた。ドレスコードで来ている人が多いと思っていたが、私たちの座った一階は入口に“STALLS”と書いてあり、これは一階席への入り口であり、普段着で来ている人が多く家族連れも多く見られた。二階への入り口には“DRESS CIRCLE”と書いてあり、これは二階正面桟敷、特等席への入り口であり、ドレスコードをして鑑賞するための席である。会場内には日本にはないBARが設置されており、アルコール類も販売されていた。

物語の内容は、童話「オズの魔法使い」のサイドストーリーであり、悪い魔女エルファバと良い魔女グリンドアの学生時代の話から始まる。生まれつき緑色の肌を持って生まれたエルファバは、学生時代、みんなから嫌われ者であったのに対し、グリンドアはそのかわいらしい容姿で、みんなの人気者であった。ひょんなことから、二人はルームメイトになってしまい、最初は嫌いあっていたが少しずつ互いの内面を理解し合う。その後、魔法界オズに降りかかる危機を二人の魔女が救うと言う、友情を描いた作品である。

以前日本で劇団四季によるものを鑑賞したことがあったが、ミュージカルが文化として定着しているイギリスと、そうでない日本との間ではいくつか違いが見られた。観客の雰囲気、日本ほど堅苦しくなく、面白いところではみんな声を出して笑っていた。歌が終わるたびに大きな拍手が起こり、感動がさらに大きくなるように感じられた。また、ミュージカル終了後、日本では何度も何度もカーテンコールがあり、なかなか観客が帰らなかったが、この時は、スタンディングオベーションの大きな拍手が一回終わると、みんなさっさと劇場を出て行った。日常的にミュージカルを鑑賞しているからこそできることだなと思った。



## 《8月31日（土）四日目 オックスフォード映画ロケ地研究》

この日は National Rail を使用し、ロンドンから一時間のオックスフォードへ向かった。ハリー・ポッターの映画の撮影地であるクライストチャーチコレッジ(Christ Church College)とボドリアン図書館(Bodleian Library)を見学し、大学近くのジ・イーグル・アンド・チャイルド(The Eagle and Child)というパブに行った。

### オックスフォード大学(University of Oxford)

オックスフォード大学は11世紀に創立された英語圏においては最古の大学である。

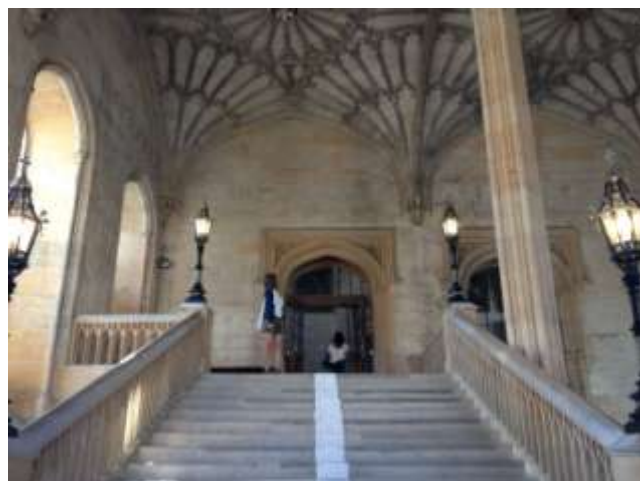
ロンドンには活気のある雰囲気だったがオックスフォードはガラリと変わって落ち着いた歴史を感じさせる雰囲気だった。ハリー・ポッターの映画の撮影地であるクライストチャーチ学寮はオックスフォード大学の中でも最も古いコレッジで十三人もの英国首相を輩出したほか、ロバート・フック(Robert Hooke 1653年在学。物理学者。科学革命で重要な役割を果たし、フックの法則を発見した)、マシュー・グレゴリー・ルイス(Matthew Gregory Lewis 1790年在学。小説家、劇作家。『The Monk』の著者)など多岐にわたり、多数の著名人を輩出した伝統あるコレッジである。『不思議の国のアリス』の著者チャールズ・ドジソン(Charles Lutwidge Dodgson)も数学者として教鞭をとっていた。

### クライストチャーチ学寮(Christ Church)

天井はとても高く、階段や廊下には至る所に紋章が描かれており、中庭は広大でコレッジの中心にあり、休み時間にはのんびり休憩できそうな落ち着いた雰囲気だった。原作の hogwarts の古城で伝統と格式のある有名校という雰囲気がとても似ていて、だからこそ映画でも歴史ある雰囲気を感じることができたのではないかと思った。コレッジというよりも城のような様相であった。



↑ グレーホールに続く階段。



↑ 映画一作目「ハリー・ポッターと賢者の石」の

ワンシーンと同じ角度から。

またグレートホール (Great Hall) と呼ばれる食堂も見学することができ、細長く縦にテーブルが三つ並べられ、天井も高く、一番奥の大きな窓からは光が差し込んでいて明るい雰囲気です。学生たちが楽しそうに食事をする光景が目に浮かぶようであった。食堂の壁には歴代の学寮長などの肖像画がずらりと並べられ、食器の一つ一つに紋章が刻まれている。食堂においても常に歴史を感じさせられた。この肖像画のなかにはルイス・キャロルとして知られる『不思議の国のアリス』の著者チャールズ・ドジソンも含まれている。この食堂に入る階段のシーンからハリー・ポッターの映画では撮影されていて、映画のシーンのように食事や宴会に向かうわくわくとした気持ちを味わうことができた。

クライストチャーチ学寮は英国国教会オックスフォード主教管区の大聖堂でもあり、大聖堂の見学をすることができた。世界各国からの観光客が訪れるらしく、八ヶ国語の案内書が入口に置かれていた。教会の中はパイプオルガンが鳴り響き、ステンドグラスから光が漏れていて神聖な雰囲気に包まれていた。礼拝は一年中行われており、テーブルに聖書が並べられていた。内陣の丸天井は約 1500 年にウィリアム・オチャード(William Orchard)によって作られ、石造りのこの丸天井は天国のイメージをかもし出すために、入り組んだ星型の模様をなしていた。中央の聖キャサリンの窓はエディス・リデル (Alice Liddell) がモデルとなっていて、その妹アリスは『不思議の国のアリス』の主人公である。



↑ Great Hall



↑ 聖キャサリンの窓。中央が Alice

Liddell

## ボドリアン図書館 Bodleian Library

クライストチャーチ学寮を出て、徒歩五分ほどの距離にある、ボドリアン図書館(Bodleian Library)も見学した。この図書館は映画において医務室とダンスパーティの練習の舞台となった。

ボドリアン図書館はオックスフォード大学の図書館の一つであり、1605年にオックスフォード大学の図書館として初めてオープンした。この独特で視覚的にも優美なこの図書館は歴史的な映画に度々使用され、その歴史を感じる落ち着いた雰囲気はハリー・ポッターの撮影でも起用されたのではと感じた。この図書館の中にもハリーポッターシリーズと関連書籍が置かれている。

重く、年季に入った扉を開けると、広く吹き抜けたホールが広がっていて、窓がとても大きいためか、明るく清潔な雰囲気であった。天井もスカートを広げたような独特の形をしており、興味深かった。



\* ↑ ボドリアン図書館



### ジ・イーグル・アンド・チャイルド(The Eagle And Child)

ボドリアン図書館(Bodleian Library)を出て、魔法を取り扱った作品『指輪物語』の作者 J.R.R. トールキン (John Ronald Reuel Tolkien) や『ナルニア国物語』の作者 C.S.ルイス (C.S.Lewis)のたまり場であったとされるジ・イーグル・アンド・チャイルド(The Eagle And Child)というパブへ向かった。初めて訪れたのにどこか懐かしさを感じる雰囲気があり、少し暗めの落ち着いた店内であった。手前の個室のような席もあれば、奥に進むと大勢で賑わうような広めの席もあった。有名なパブとあってか観光客らしき客もいたが、カップルが食事を楽しんだり、地元の人らしき人がカウンターでビールを飲んでいたり、奥の広いテーブルでは若い学生らしき人々が大人気で食事を楽しんでいた。パブはもっと活気に満ち溢れているのかと想像していたが、ここでは予想に反して落ち着いた雰囲気であったため、作家たちのたまり場となっていたのかなという風を感じた。



↑名前の通り、鷲と赤ちゃんの看板。



↑イギリス伝統料理 Fish & Chips を堪能。



《9月1日(日) 五日目 ハリーポッタースタジオ研究(Warner Brothers Studio Tour London The Making of Harry Potter)、大英博物館(The British Museum)見学》

このスタジオツアーはワーナーブラザーズが公式に開いたツアーで、2012年3月にオープンした。世界的大ヒット映画ハリー・ポッターで実際に撮影に使用されたセットや小道具、コスチュームなどが展示されている。



↑博物館入口

＜ハリーポッターシリーズのあらすじ＞

ハリー・ポッターの物語は両親を亡くし、親戚の下で暮らしていた主人公ハリーがある日突然、魔法学校ホグワーツからの招待状を受け取り、自分が魔法使いであると知り、ホグワーツに入学する。そこでの友人達との冒険や学校生活を描いたファンタジー児童文学である。両親を殺した史上最悪の闇の魔法使いヴォルデモートを倒すためにハリーとその仲間たちが魔法界の法と秩序の中で奮闘し、平和を取り戻すというストーリーである。全部で七シリーズが出版、映画化されていて世界で六十七言語に翻訳されている。

開店と同時に建物の中に入ると、実際の映画に使われた音楽が流れ、天井の壁には出演者たちのポスターが並べられていて今からまさにハリー・ポッターの世界に行けるような期待が高まった。

ツアーは最初案内と注意事項の説明があり、出演者からのメッセージ DVD を鑑賞して、

実際にセットの中は自分のペースで鑑賞するという内容であった。このツアーは世界各国からの来場があり、私たちがツアーに参加した日はイタリア、ポルトガル、韓国、ブラジルからの参加者もいて、ハリー・ポッターが世界的に大ヒットした作品であることを痛切に感じた。私たちは日本語の音声ガイドを借りて、このツアーを堪能することにした。

この報告書では、①セット②小道具③コスチュームの順に書いていく。

## ① セット

セットは蜘蛛の巣や本の背表紙、ほこりなどパッと見ただけでは見つけることができないところまで緻密に再現されていた。それぞれのセットの設計図や初期のデザインから完成までのデザインの移り変わりも展示され、職人たちの気迫と執念を感じ取ることができた。また、物語の舞台であるhogwartsは歴史ある古城ということもあり、セットはすべて歴史を感じさせる重みがあり、格式高い雰囲気を感じ取ることができた。また、撮影に使われた廊下を実際に渡ってみることができたのだが、床は平らではなく、凹凸があり、きしんでいる部分や板が傷んでいる所が見受けられた。映画のシーンでは数秒間しか使われていないし、映画を観た限りでは床に凹凸があることは視聴者には確認困難であるにも関わらず、このような工夫がなされていることに感動した。大広間という学生たちが食事をするセットでは食器の一つ一つに紋章が刻まれているところなども鑑賞することができ、寮のセットは生活感が醸し出されていて、暖炉の脇に靴下が干してあったり、それぞれのベッドのそばには登場人物たちのお気に入りのポスターが貼られていたり、まるで自分もその世界に飛び込めそうな雰囲気のセットになっていた。杖を販売しているオリバンダーの店や校長ダンブルドアの書斎は、一つとして同じ名前の杖や背表紙はなく、ここまで入念に作られていたのかと驚嘆した。hogwartsには多数の絵画があり、映画にも登場するのだがその絵画も専門家によって一つ一つ手作りで丁寧に作成されていた。



↑hogwarts城の模型。城の全体の撮影をする時はこの模型を使って撮影された。



↑学生寮のセット。

## ② 小道具

ハリー・ポッターの映画ではたくさんの小道具が使用される。杖や箒、魔法の品々が多いからである。例えば杖を例にとってみると、魔法の杖は出演者全員が所持しているが、その一つ一つに特徴が加えられていて材質や杖の曲がり方、持つ柄の部分など細部にわたって緻密に製作されており、ここまで細やかに作られていたのかと感動した。食器に至っても、伝統ある格式高い食器から一般の家庭で使われているような庶民的な食器まで丁寧に作られていて、製作者のこの映画に対する強い思いを感じ取ることができた。



↑一人一人デザインの異なる杖。

また、この物語では現実には存在しない生物が数多く存在する。その生物たちが原寸台で体毛や羽毛の一つ一つが丁寧に再現されていて、まさに命が吹き込まれているような存在感のあるものが作られていた。魔法薬の小道具は瓶の中身の液体は赤や青、黄色、黒などさまざまな色をしていて、とても面白かった。さらに、実際に瓶のなかには薬草などが詰め込まれていて、私たちがコーンウォール地方の魔法博物館で鑑賞した魔法薬の瓶と類似していた。ハリー・ポッターの映画の中でもマンドレイクが登場するのだが、顔や体のしわも綿密に刻み込まれており、ボタンを押すと映画のようにマンドレイクが動き出す工夫がされていて、映画のファンには嬉しい仕掛けとなっていた。



↑森番ハグリッドのペット『バックビーク』

『マンドレイク』→





### ③ コスチューム

この物語の世界では制服から普段着、ドレスなど様々な場面があり、場面ごとの衣装が展示されていた。汚れていたり、くたびれていたり、破けていたり激しい戦闘のシーンの衣装や、パーティの時のドレスの製作過程を見ることができた。一つの衣装に何十人という人の手加えられていて、意見交換で議論している様子を見ることができ、職人たちの熱い思いを感じ取ることができた。学校が舞台となっていることもあり、これほどシリーズ化されている作品は数多くの出演者が存在するが、その一人一人の制服や衣装をそれぞれ製作することは容易ではなかっただろうと想像できる。また、この映画シリーズはおよそ10年にわたって製作されたため、ちょうど子供たちの成長過程にあたり、制服を何度も作り直したというエピソードもあった。

さらに、この映画で登場する小鬼や巨人のマスク鑑賞をすることができたのだが、すべて顔の作りは同じなのに、表情やしわが違うだけでまったく同じ小鬼には見えなかったのが驚いた。このマスクの製作過程のビデオも見ることができ、型取りを繰り返している様子も伺えて、製作者の苦悩も見ることができた。



↑三作目「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」 ↑同じく三作目より狼男のロボットより、ハリー、ハーマイオニー、ロンの私服。  
ハリーには映像の特殊効果を使って体を消す、「透明マント」が着せられている。

ハリー・ポッターという世界的に大ヒットした映画の背後にある製作者の陰ながらの苦悩や、職人たちによる緻密に作り上げられた品々を目のあたりにして驚嘆すると同時に圧倒されてしまった。彼らの忍耐強さとこの映画に対する熱い思いを小さな小道具一つからも痛烈にと感じることができ、極めて充実した研究旅行にすることができた。原作者の J.K. ローリング (Joanne Rowling) はこの物語を映画化する際に、出演者をすべて英国人にするを条件としており、米国人を出演者として使うと軸が崩れると主張していた。これはイギリスに古くから魔法文化があり、そのことを原点にして、このハリー・ポッターの物語を作成したので、その軸を壊さないためにも出演者をすべて英国人にするというこだわりがあるのではと思った。要するに、この映画には監督、出演者、製作班など何万人にも及ぶ人の熱意が込められていて、それが世界的に大ヒットした所以なのかもしれないと感じた。

### ちょっと一息。。

このスタジオツアー内にはカフェスペースが設けられていて原作に出てくるバタービールを売る店があったので私達もバタービールに挑戦してみることにした。

バタービールとは飲むと身体がすみずみまで温まり、魔法族の人々の好物として原作で登場していた。映画でも度々登場し、主にパブやクリスマスのお祝いの時などに飲まれていた。実際に飲んでみると、上に乗っている泡はキャラメルを泡立てたものであり、下は、茶色く色づけされたサイダーのようなものであった。とても甘くてアルコールは入っていなかった。



### 大英博物館(The British Museum)

ここでは古代の宗教儀式や魔法・魔術に関する展示物を鑑賞した。魔法使いと称されていたエリザベス 1 世(在位 1588 年—1603 年)に仕えた占星術師・数学者ジョン・ディー(John Dee 1527 年—1608 年)が使用したとされる水晶球や錬金術の道具が展示されていた。エリザベス 1 世は何か困ったことがあると、彼に相談し、将来を占ってもらっていたとされている。展示されていた Dee の道具は古物研究家を通して大英博物館に持ち込まれた。

「神の印章」(Seal of God)と呼ばれる大きな版は、魔術的な名前と象徴が刻まれており、彼はこれを宇宙の秘密を解く神の見解を見るために使ったと伝えられている。二つの小さな版は Dee の「魔法の机」(Table of Practice)、つまり、この版の上で魔法を使用していたとされている。金の版は「四つの城の像」(Vision of the Four Castles)と呼ばれているものが刻み込まれている。黒曜岩の鏡は元々メキシコのアステカ人のもので、魔法の気を呼び寄せるのに使われていた。

これらの展示物を鑑賞してみると、不思議な文字が複雑に刻まれていたり、水晶は想像していたものよりも小さいもので驚いた。特に金の版は中央に星のようなものが二つほど絡み合っていて描かれていて、神秘的な魔力があるように感じられた。



↑ジョン・ディーの道具

## 《9月2日(月) 六日目 マーケット研究》

地下鉄コヴェントガーデン(Covent Garden)駅から降りてすぐの、アップルマーケット(Apple Market)とジュビリーマーケット(Jubilee Market)を研究することにした。マーケットは観光客や地元の人でとても賑わっていて、パフォーマー達が音楽を演奏したり、歌を歌ったりして陽気な雰囲気であった。マーケットは銀食器やティーセット、古本、アクセサリーなどアンティークな一点ものや職人の手作り文房具が数多く並べられていた。銀食

器一つにおいても手がでないような高級品から安物まで様々で、実際に手に取って吟味できるののでいい経験になった。また、「いいな」と思っていた商品があっても、少しほかの所を見ていただけてもう売られてしまっていて、マーケットは一点ものしか販売されていないので早く買っておけばよかったと悔しい思いもした。マーケット内にタロットカードや魔女や魔術の模様のようなチャームもあり、日常的に魔法文化が浸透しているなど感じた。店員もみな気さくな人ばかりで、地元の客らしき人とおしゃべりを楽しんでいたり、私たちのような観光客には優しく話しかけてくれ、欲しいものを伝えると一緒に探してくれたりした。マーケット内には食事できる所もあり、おいしそうな匂いが漂っていた。日本には日常的にこのようなマーケットがないため、とても面白い経験になった。



↑ オープン前の準備段階の様子。



↑ 作品に登場する、ダイアゴン横丁の様な賑わい。



## 【第五章：考察、文献表】

### 考察

以上の研究から私たちは、特にイギリスにおいて魔法文化が浸透している理由として、次の三点を挙げてみたい。

第一に、私たちは主としてロンドンとコーンウォールとオックスフォードを回っただけだが、イギリスには各地に古い建物が多く残されており、古い建物に入ると、暗さと湿り気、時として寒気やかび臭さが交じり合ったような雰囲気包まれる。そこには長い歴史やそれにまつわる伝統があるだろうし、不幸な出来事もあっただろうと感じられる。つまり、理性的で明快な現実の出来事のほかに、魔法や魔女のような、それとは対照的な側面があったことを想像させてくれる環境がイギリスには多いと思う。

第二に、イギリスの各地には、大聖堂を初めとして教会が必ずあり、キリスト教国であることを感じさせてくれる。このキリスト教の正典である聖書には、例えば、イエスの奇跡物語などがあり、このような信仰が日常生活において世俗化していった、魔法のような形で一般の人々のうちに現れたのではないかと考えた。また、キリスト教が発展するとともに、キリスト教が禁止する魔法のようなものが明確になり、キリスト教と対立しつつ対抗文化としての歩みをたどってきた可能性もあるだろう。

第三に、イギリスは科学の発展に最も貢献した国の一つであるが、科学が発展すればするほど、逆に、人々は未知の分野が多いことにも気づいたり、説明や証明のできない現実の現象に戸惑ったりすることを通して、無意識的にはあっても魔法や魔術のような分野を作って、そこに安住しているのかもしれない。私たちは魔法について調べていくうちに、イギリスには「魔女」という職業があって、薄暗い部屋でアロマをたいてカウンセリングや占いのようなことをしている人もいることを知った。私たちはこのような人々に直接インタビューできなかったが、コーウォールの魔法博物館の館長は自称、魔法使いであり、館長とのインタビューは上記の通りである。

最初は『ハリー・ポッター』というファンタジー物語が大好きで、魔法文化に興味を持ち、この研究旅行を行ったのだが、自分の興味あることを自ら調べ、現地に赴き、肌で感じるということがこれほど満足できることだとは思わなかった。毎日イギリスの魔法文化に触れるとても充実した一週間を過ごすことができた。

魔法使いがたくさん住んでいたとされるボスカッスル(Boscastle)という町は、人里離れたまさに秘境という感じの小さな町で、どこかに魔法使いが住んでいそうな雰囲気だったのが感動した。魔法博物館は私の想像よりも多くの展示物があり、これほどイギリスの各地に魔法にまつわる品々が残されていたのかと思い、イギリスという国は神秘的に包まれているなど感じた。魔法というものが御伽話の世界だけとっていたが、今回の旅を通して、実際に文化として存在し、人々の生活の中で浸透していたことを知ることができたの



が大きな収穫であった。

ロンドン、オックスフォード、コーンウォール地方と三つの都市をこの旅で巡ったがロンドンは都会で活気にあふれる街だったが、人と建物ばかりではなく街のいたる所に公園や緑があって洗練された雰囲気であった。オックスフォードは歴史を感じさせる落ち着いた雰囲気、コーンウォール地方はイギリス最西端の海沿いの街で田舎であったが、秘境のような神秘的な雰囲気、と三つとも雰囲気が異なっていて、それぞれ感じたことも違っていて面白いと感じると同時に、スコットランド地方の魔法文化でもまた一味違ったものが感じられるのではないかと思った。ハリー・ポッターの世界では、都会の洗練された現代の様子が描かれているのと同時に、伝統と格式のある神秘的な魔法の世界も描かれているので、この私たちの住む世界に、「もしかしたらこんな世界もあるのかもしれないというような好奇心を掻き立てられる気持ちになるので世界的に大ヒットしとのではと考えた。

この旅を通して自ら予約したり、メールで博物館に問い合わせアポイントをとったり、現地の人に交渉してタクシーを呼んでもらったりと、初めて体験するものが多くあった。また、期待よりも不安のほうが大きかったり、思うようにコミュニケーションが取れなくて、私たちの伝えたいことがうまく伝えることができなくても、現地の人が一生涯懸命に理解してくれようとしていたり、丁寧に説明をしてくれたりといギリスの人々の温かさに触れることが出来た。そして、時には怪しい人にお金を要求されるなど、波乱万丈な旅であったが、無事に充実した旅にすることができて嬉しく思う。この旅を通して私たちはまた一回り成長することができ、また自分達の知らない世界がたくさんあると思うと、もっと世界各地を旅して見分を広めていこうと心に決めた。

このように、私たちが成長する契機になったこの研究旅行奨励制度と、そのコーディネーターの西山達也先生と委員の宮崎克則先生、国際文化学部先生方、学科主任の山田順先生、親身になって相談に乗ってくれた宮平望先生に感謝したい。そして最後にこの旅で私たち二人が感動を共有し、苦難を共に乗り越えることができて本当に嬉しく思う。

## 文献表

- 鷹井潤／古田島綾子『ハリー・ポッター物語への旅』（竹書房,2002年）  
荒俣宏『イギリス魔界紀行 ハリー・ポッターの故郷へ』（日本放送協会出版,2003年）  
M.エリアーデ／楠正弘『オカルティズム・魔術・文化流行』（未来社,1978年）  
岡田章子『魔法と妖精 イギリスロマン派の詩人達』（あぼろん社,1991年）  
R.v.デュルメン(佐藤正樹訳)『宗教,魔術,啓蒙主義 16世紀から18世紀まで』(鳥影社,1998年)  
キース・トマス(荒木正純訳)『宗教と魔術の衰退 上、下』(法政大学出版局,1993年)  
マーヴィン・ハリス(御堂岡潔訳)『文化の謎を解く 牛・豚・戦争・魔女』(東京創元社,1988年)  
ピーター・ヘイニング(岡村好子訳)『幽霊屋敷 絵と写真でみる西洋幽霊史』(国書刊行会,

1982年)

正木晃『魔法と猫と魔女の秘密 魔女の宅急便にのせて』(春秋社, 2003年)

牟田和男『魔女裁判 魔術と民衆のドイツ史』(吉川弘文館, 2000年)

The Museum of Witchcraft    Boscastle Cornwall PL35 0HD 01840 250111

J.K.ローリング (松岡佑子訳)『ハリー・ポッターと賢者の石』(静山社、1999年)

『ハリー・ポッターと秘密の部屋』(静山社、2000年)

『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』(静山社、2001年)

『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』(静山社、2002年)

『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』(静山社、2004年)

『ハリー・ポッターと謎のプリンス』(静山社、2005年)

『ハリー・ポッターと死の秘宝』(静山社、2008年)